

農学はいま、持続可能な社会の実現に欠かせない実践学となっています。  
ここではインタビューを通じて、農学生命科学研究科に学ぶ現役学生と、  
弥生キャンパスを巣立った先輩たちのいまをご紹介します。

## ON THE CAMPUS



ジョーダン・ホワイト・  
スプリングー Jordan White Springer

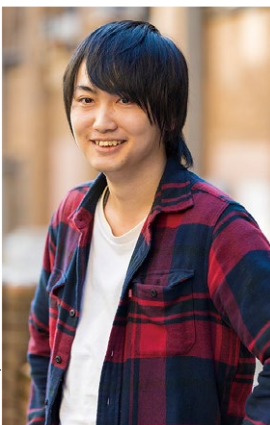
国際植物資源科学研究室 2017年博士課程進学

もともと農業が大好きで、大学卒業後はアメリカの農務省で働くことも考えましたが、日本の大学へ留学して農学を学びたいと思い、この道に進みました。私の研究は農地の土壌の硬さについて。特に雨の多い日本では、土を耕して表面の土をフカフカの状態にしても、そのすぐ下に硬い層ができやすく、農作物はうまく成長しません。どうすれば土を軟らかい状態に戻せるか、それが修士課程から取り組んでいる研究テーマです。私が試しているのは透明マルチシートを利用した新しい方法です。農地で実験を繰り返し、土中90cmまでの土壌の硬さの変化や、植えたキャベツの生育具合などを調査。また、土中の微生物バイオマスを測定し、効果のメカニズムの研究をしています。卒業後は日本の企業で働こうと考えていますから、論文作成と並行して就職活動も頑張っています。

野尻 太郎 Taro Nojiri

(総合研究博物館)遺体科学研究室  
2019年博士課程進学

子どもの頃から哺乳類が発する声と、そのコミュニケーション活動に興味があり、中でも超音波を使って、周囲の環境を探るエコーロケーションという行動を取るコウモリに夢中になりました。それでこの超音波を受容する聴覚器官の蝸牛がどう進化を遂げたのか、その研究を長期スパンで取り組んでいます。コウモリの胎児をCTスキャナーで撮影し、聴覚器官の骨の発達を研究していますが、自分なりの成果は上がっていると思います。次のステップはコウモリが超音波を発振するノドの筋肉や骨の研究です。実は聴覚器官と発振器官のどちらが先に進化したのか、その順番はまだ判明していません。その謎を探究したいと考えています。将来的には博物館の学芸員として勤務しながら、子どもたちに科学の楽しさを伝える仕事ができればと思っています。



キャベツ  
800個を収穫

哺乳類の  
コミュニケーションって？

農作物は  
畑の土が命

## Q なぜ農学国際専攻を選んだの？

Why have you chosen Department of Global Agricultural Sciences?

途上国の  
食生活改善が  
したい

学生同士の  
国際交流が  
活発

海外で  
フィールド  
ワークを  
体験



酒井 悠衣 Yui Sakai

国際情報農学研究室 2018年修士課程進学

小学生の頃にユニセフの募金活動を通して、同じ人間なのに自分と境遇が異なる人が世界に大勢いることを知りました。それで募金活動のほかに何か違うことはできないかと思っていたときに、大学の授業で「国際協力論」履修。さまざまな形態で国際貢献ができることを学び、途上国の暮らしに役立つ研究に取り組みたいと思いました。私が興味を持ったのは東南アジア諸国の食料事情。この地域で問題になっているのが、栄養過多と栄養不良という栄養障害の二重負荷です。私は塩辛いインドネシアの食事に着目して、現地で長期のフィールドワークを実施。塩分の摂取源として各種調味料に特化し、データを収集している最中です。途上国の栄養障害と食生活の改善に関する研究は、さらにフィールドを広げて、博士課程に進学しても継続しようと考えています。



詳しくは、東京大学 大学院農学生命科学研究科 農学国際専攻  
<http://www.ga.a.u-tokyo.ac.jp/>

## IN THE SOCIETY

卒業生人名録 06

## 農業では誰もがヒーローに

そこには無限の研究テーマがある

ファームサイド株式会社 代表取締役 佐川友彦

農業経営に参画する以前は  
デュボンやメルカリに勤務されて  
いました。

小学生の頃から環境問題やサステイナビリティへの関心が強く、大学でも自然や環境を学べる農学部を選択。デュボン入社後も太陽電池の寿命を延ばす研究開発に従事しました。4年で辞めたのはサイエンスとビジネスの折り合いをつけるのが難しかったからです。メルカリで働いたのはごく短期間。成長途上のベンチャー企業で学ぶことは少なくありませんでしたが、この頃から自分には東京より地方で働くほうが合っていると感じました。夫婦で相談し、職も決まっていなかったのに住み慣れた宇都宮に移住。あるNPO法人から紹介されたのが阿部梨園でした。そのとき、あらためて「そうだ、自分は農学部出身だったんだ」と思いました。

実際に飛び込んだ  
日本の農業の現場は？

農学部時代から、いつか農業の現場に関わってみたいという思いは漠然とありましたが、実際に足を踏み入れると、そこは「困りごとの山」。そうした無数の困りごとを棚卸して、一つ一つ改善していくのが私の役割でした。事務所のごみ箱に分別のシールを付けるような小さなことから始め、パンフレットの改善、梨の樹の配置図の作成、あるいはスタッフの作業時間や生産量のデータを収集し業務の効率化もはかりました。さらに厚生年金や健康保険の導入……。細かいものもカウントすれば、業務改善は3年間で500件を超えました。



クラウドファンディングを活用して改善のノウハウを  
無料公開し、話題になりました。

どの事例も今の日本のほとんどの農家に共通する課題だと気づい

### PROFILE

佐川 友彦 Tomohiko Sagawa 1984年群馬県生まれ。東京大学農学部、同修士卒業。外資系メーカーを経て、栃木県の阿部梨園に参画。生産以外の業務を管掌し、代表阿部の右腕を務める。大小500件に及ぶ業務改善を実施し、経営の安定化とブランディングに成功。さらに改善事例を公開するクラウドファンディングを実施し、330人から約450万円を集め話題を呼んだ。その成果は「阿部梨園の知恵袋」として無料公開され、多くの生産者に活用されている。現在は平行してファームサイド株式会社を立ち上げ、コンサルティングや講演活動も行っている。

たからです。公開すれば必ず役に立つんじゃないかと。一方で、これは企業秘密でもあり、他の農家との差別化や利益の源泉になっています。でも、公開することの意義を梨園の経営者も理解してくれました。クラウドファンディングを活用したのは、資金が集まれば阿部梨園にもメリットがあるし、全国的な注目を集めると考えたからです。目標額の100万円に対し、最終的には450万円が集まりました。こうして2018年5月に経営改善ノウハウを集めたウェブサイト「阿部梨園の知恵袋」がスタート。改善記事はまもなく300件に達します。



阿部梨園の知恵袋  
<https://tips.abe-nashien.com>

おかげさまで日本各地の農家の方々と関係が広がり、講演やワークショップを行う機会も増えました。今春には「知恵袋」をベースにした本も出版される予定です。

佐川さんの仕事を一言で表現するとしたら？

「農家のプロの右腕」、あるいは「農業の改善専門家」といったところでしょうか。目指すゴールは農家の方々がずっと農業を続けることができて、日本の農地が守られていくことです。そのためには農業界の林修先生や池上彰さんのような存在でありたいですね。つまり、難しい問題を分かりやすく説明し、その根っこを突き止め、解決策と一緒に考える立場にいたいと思います。農業の現場には今も課題が山積み。言い換えれば、無限の研究テーマがあるということです。農学を学んだ人なら必ず役に立つものを見つけられるし、誰もがヒーローになれる可能性がある。できれば、在学中から農業の現場に出て行って、農家の方とどんどん関わってほしいですね。

